

『発刊』によせて

会長 浅田 隆夫

本学会が四半紀の星霜を経た今日、本書によって自らの歴史を回顧することができたことは誠に記念すべきことであり、また、この機に居あわせた幸運を会員の皆さんと心から喜びたいと思います。

思えば、昭和39年3月、15名から発足した創業時代から学会への発展を夢みてきただけに、一人、感慨深いものがあります。

今日、対外的には東西対立の解消とそれに伴って生じている紛争があり、対内的には55年体制の崩壊と経済社会の変革、自由時間の増大、高齢化社会の急進など未曾有の難題が山積しています。

このような社会変動により、21世紀に向けてパラダイムの転換が求められているものの、それへの不透明さはさらに増し、その対処法は難しくなっています。

たしかに、この'90年代後半は、「本もの」（自然との共育・調和など）の世界創造に向けて人類がどのような知恵を発揮するか否かの分水嶺に差しかかっているといっても過言ではないでしょう。レジャー・レクリエーション（以下、L/Rと略記）生活についてもまた然りです。

周知のように、Leisure and Recreation Life の Life には、「生命」「生活」「生きがい」の3つの内容があり、「生命」は肉体的生命でいつまでも生き生きとした肉体であること、「生活」は豊かな社会生活で物心とも豊かな生活を充実させること、「生きがい」は精神的な満足感をうることであり、これらは要するに、よい人生設計には「健康」（生命）、「所得」（生活）、「自己充足」（生きがい）の3つが大切だということなのでしょう。しかし、これまでは、この3つを個人の問題として考え、社会の問題として捕えることとなく欠けていたように思います。

21世紀におけるL/R生活における問題解決は、社会の問題として捕え解決するような研究態度が重要だし、それを優先させるべきでしょう。

いうまでもなく、また、L/R問題は広領域に誇る研究分野だし、個人の自由で制限のない状態になり易い対象だけに、明確なビジョンのもとに自由な発想を出し合い、かつ、異なる専門分野の人達の間で刺激し合い課題を出し合って自己改革の一助にすることが望まれます。そして、できればこれを継続的なプロジェクト研究として実施していくような試みが、実りの多い成果を生むことになるでしょう。特に、この'90年代後半から21世紀初年代にかけては（前述の状況からも）、この知恵の源泉としての学会の存在とその役割がますます期待され、かつ、重要なものとなるでしょう。

おわりに、本書の刊行にあたり、ご尽力頂いた役員の方々の努力に対して敬謝の意を表するとともに、'95年というこの機を本学会の充実発展の年にしたいと思います。

また、さらには、本書が、今後のL/R研究や振興に資する資料として本学会員はもちろん、隣接科学や関心のある方々に活用されることを願い、発刊によせる言葉といたします。